

情報科学会誌の読み方

坂本直人

(九州産業大学・情報科学部教授)

情報科学会誌は九州産業大学情報科学会の諸活動、すなわち、情報科学部と情報科学研究科の教育研究や大学内外での活動の状況と成果を紹介する役割をもっています。会誌が創刊以来ほぼ予定通りに発行されて慶しく思います。この会誌が配布されたとき、学生の会員(普通会員)の皆さんには、この会誌の全てに目を通す読み方をしたいものです。その中には興味を引く内容が必ずある筈ですから、それらの論文はじっくりと読んで下さい。会誌に掲載されているそれぞれの論文には各著者の思いが込められており、一つの文にも端々まで著者の精力が注がれています。文章を読むときには、著者が伝えたい内容を理解するまで、一字一句おろそかにせず読む習慣を身に付けて下さい。



一つ一つの文も大切にするのは、このような冊子体の会誌や雑誌、書籍などが皆さんの手許に届くまでには著者や出版者の多大な労力と時間が掛けられているからです。確かに、コンピュータのお陰で、文章の書き直し、印刷が非常に容易になりました。ワープロ(word processor)を使えば、文章の構成をいろいろ試みることができ、推敲を何度繰り返しても余り負担にはなりません。しかし、文章の構成と内容をどの水準にするかは著者の判断であり、ワープロはそれを助けてはくれません。対象となる読者の受け止め方を予測する総合力が著者に要求されます。また、コンピュータを使えば印刷も個人が立派にできるようになりました。大学時代に新聞発行に携わり、緊急時には活字を拾う経験もしましたが、印刷業界でのコンピュータ利用の普及は急速で、既に活版印刷が行われなくなってしまいました。最後の活版印刷の漢和辞典ということに惹かれて「大字源」を購入してしまいましたが、それはもう1992年のことです。出版までにこのようにコンピュータが随所に使われ、省力化されているとしても、それでも、著者や出版者の苦労を考えれば、手許に届く印刷物を読まずに捨てることは私にはできそうもありません。私が新聞や総合雑誌を購読しないのは、読まずに捨てることはできず、納得するだけ読む時間もないし、どんどん溜まるばかりだからです。

ワープロの恩恵は私も十分に受けていますが、最初からワープロに直接入力して原稿を作成するのは私は苦手です。やはり、最初の原稿は紙に書く方が考えをまとめ易いように思えます。数学の問題を解いたり、コンピュータからのデータをまとめるのにも紙の上の方がじっくりくるように感じます。手で文字を書く動作を通して考えがまとまっていくのでしょうか。インターネットで大量

のマルチメディア情報が容易にやりとりできるようになり、社会全般に活字離れの風潮があるにしても、冊子体の印刷物や書籍は今後も必要であると考えます。報告や論文の構成、著作の構想などにはそれまでの知識を総動員し、選択した知識を統合する能力が要求されます。知識の獲得と構造化・体系化には図書館での書籍の活用が必須であり、結局は早道であると思われるからです。福岡市美術館で先日開催された大英博物館展にマルクスの図書館入館証が展示されていました。マルクスは資本論の執筆のため毎日同じ席に座り、ついには席が擦り減ったという話です。彼の思想体系を創り出すには、まさに万卷の書を読むほどの知識の獲得と思索が必要だったのでしょうか。ダーウィンが進化論を体系化したのもその頃です。人類の価値観を大きく変えた彼等ならインターネットをどのように使いこなしたのでしょうか。しっかりとした構成や構想に基づいて必要な情報を獲得、確認するにはインターネットは極めて有用であるといえます。しかし、インターネットを活用して知識を統合する能力を身に付けるのは図書館の活用よりは多くの労力が未だ必要のように思われます。

インターネットを通して情報の獲得が容易になればなるほど自分に必要な情報を的確に取舍選択する能力、総合力、価値観が重要になります。そのような力を形成するにはより広い教養の蓄積と思索が必要です。教養を身に付けるのは大学時代が最適であり、それには雑学を含め幅広い読書が非常に有効です。もちろん、読書は本来楽しむためのものであり、どの本もその人が読みたいときに読めばよいのですが、大学卒業までには、日本の名作、世界の名作といわれる著作にはなるべく多く目を通しておくことを勧めます。とくに、長編小説（文庫本で5, 6冊以上の作品）を読み通す経験を積み重ねて、大学生の間に読書の楽しみ、面白さを味わって欲しいものです。日本の小説であれば、全著作に目を通したくなる作家を見付けることを勧めます。私は高校、大学時代に夏目漱石を選びましたが、現在では古典に過ぎるかもしれません。漱石以後で私の好きな司馬遼太郎ならば、「竜馬がゆく」、「坂の上の雲」、「世に棲む日日」などから始めてみてはどうでしょうか。こういう人生もあるのかという思いがふつふつと湧いてくることでしょうか。「空海の風景」、「項羽と劉邦」、「韃靼疾風録」では中国の歴史にまで思いを馳せることができます。

大学が専門職業人となるための教養を身に付け、基礎力を養う役割も担っていることは世界的にも共通の考えであり、米国の教育体制には専門大学院制度として組み込まれています。経営学、法学、医学、薬学、工学などの専門大学院（professional school）への入学資格は4年制の大学卒業となっており、志願者は自然科学、人文科学、社会科学、語学の教養を養う大学生活を4年間送り、それから専門教育を受けることとなります。日本では法科大学院と医学部が専門大学院に相当する形になっていますが、学部にも専門教育も教養教育も押し込まれています。専門職業人となるための教養教育が非常に貧弱です。それでも以前は教養教育のカリキュラムに自然科学、人文科学、社会科学、語学の修得がきちんと謳われていましたが、現在はそれも曖昧です。情報科学部と情報科学研究科は社会と人間が必要とする情報環境を創造する人材の育成を教育研究の理念としています。大学時代が外国に比べ余裕がなく、それなりの努力が必要ですが、皆さんがこれからの情報社会を担うために幅広い教養を身に付けることを期待します。